

2. 米国の劇場・ホール等におけるボランティア活動の概要と実態

次に、米国の劇場やホールにおけるボランティアの具体的な活動内容を見てみよう。劇場やホールと言っても、わが国の公共ホールや劇場とは、組織の成り立ちや運営の基本的なしくみ、そしてボランティアに求められる役割も大きく異なっている。

今回の調査では、6つの施設・機関に対する調査を実施したが、まず、米国の劇場やコンサートホール等におけるボランティア活動の状況を概観したうえで、各事例の調査結果に基づいて、具体的なボランティア活動の実態を整理する。

(1) 劇場・ホール等におけるボランティア活動の概要と調査対象事例

① ボランティア活動の種類

米国の劇場・ホールにおけるボランティア活動は、具体的な運營業務をサポートする「手足のボランティア」と、理事会やファンドレイジングなど、「リーダーシップのボランティア」、「専門知識を活かすボランティア」の三つに分けられ、それぞれ具体的な活動内容としては次のようなものがあげられる。

● 手足のボランティア

- ・事務作業のボランティア:DM の切手貼りや封筒づめ等、オフィスの雑務手伝い
- ・オモテ方のボランティア:アッシャー(プログラムを渡して席に案内する係り)
- ・チケット・セールスのボランティア:チケットの予約・発券や販売業務に関するボランティア
- ・ショップのボランティア:ショップの販売員など
- ・企業のマッチング・ギフトの下で参加する何らかのお手伝いのボランティア

● リーダーシップのボランティア

- ・ボード・メンバー:理事会、評議員会のメンバー
- ・ファンドレイジングのためのボランティア:ファンレイジング・パーティーの企画・管理・実行等
- ・コミュニティ・リーダーとしてのボランティア:例えば、PTA、商工会議所、青年会、消防団、ゲイの団体など、地域に密着した他の団体のボランティアが、劇場やホールとの協力で行なうプロジェクトのため運営推進係を行なう場合

● 専門知識を活かすボランティア

- ・プロフェッショナル・ボランティア:会計、マーケティング、グラフィックデザイン、翻訳、法務相談等、専門知識や技能を、無料で提供するボランティア

これらの他にも、例えば、自分のアパートの一室を打ち合わせ場所として無料で貸し出すなど、「in-kind gift」と呼ばれる形でのボランティアも存在する。

また、劇団やオーケストラ、ダンス・カンパニーの活動に対するボランティアも、上記の内容とほぼ同様の形で存在している。ただし、多くの芸術団体は、劇場やホー

ルのレジデント・カンパニーとして活動しているため、上記の施設側のボランティアと明確な区分をすることは難しいのが実状だろう。

② 芸術フェスティバルのボランティア

米国では、特に夏季に各地で様々な芸術フェスティバルが開催されているが、そこでは、たいていの場合多数のボランティアが活躍している。業務の内容はチケットの予約受付や販売係り、会場整理、もぎり・客席案内、ショップでの販売員など幅広い分野にわたっている。

フェスティバルの場合は、短期間に大量の業務が集中するため、恒常的な組織体制では対応しきれないことが、多数のボランティアを導入する理由のひとつになっている。フェスティバルにおけるボランティアはわが国でも採用する例が増えているが、例えば「タングルウッド・フェスティバル」や「サラトガ・パフォーミング・アーツ・フェスティバル」など、規模の大きいところでは、数百名から1,000人近いボランティアが活躍している。ボランティアのマネジメント自体もボランティアの自治によって行われているケースが多い。

③ その他パフォーミング・アーツに関連したボランティア

米国では、リタイアした普通の人をボランティアとして集め、彼らに朗読をしてもらったり昔話をしてもらったり、そういう人たちをまとめてトレーニングをして即興舞台にして、それを地域の小学校とか老人ホームとかで演じて地域内をツアーしてまわるといったような活動を行っている非営利団体も見られる。

こうした例は、劇場やホールなどの文化施設、あるいは劇団やオーケストラなどの芸術団体、芸術フェスティバルといった具体的な催しとは直接的な関係がなく、すなわちボランティアが支援する対象がない形ではあるが、パフォーミング・アーツ分野のボランティアとして興味深い活動といえる。

また、米国の文化施設では、インターン制度を採用しているところが多い。インターンは、将来芸術の分野での仕事をしようとする学生が、一定期間劇場やホール、美術館等で研修を行うもので、大学や大学院のアート・アドミニストレーション・コースでも、カリキュラムの一部に組み込まれている。これは、ボランティアというより、専門的な人材の育成といった観点から捉えられるべきだと思われるが、無償かつ何等かの形で文化施設の運営をサポートしているという点では、ボランティアに通じる要素を持っている。

④ 調査対象事例

こうしたことから、今回の調査では、次の6ヶ所の文化施設、団体、機関を選出し、インタビュー調査を実施した*2。

- The Symphony Space(シンフォニー・スペース): 廃屋の映画館を地域住民が

*2 それぞれの施設の概要やボランティア制度の内容は、巻末の調査事例資料に整理した。

II. 米国のパフォーミング・アーツ分野におけるボランティア活動の実態

劇場に再生、会員勧誘などのカウンター業務を中心にボランティア活動を実施

- **The Snug Harbor Cultural Center(スナッグ・ハーバー・カルチュラル・センター)**: 20世紀初頭の船員のリタイアメント施設を文化施設として再生、一般事務やギフトショップの販売員、施設案内、もぎり・客席案内などにボランティアが活躍
- **The Kennedy Center for the Performing Arts(ケネディ・センター)**: 細分化された業務内容、充実したマニュアル、自治組織による運営など、完成度の高いボランティア制度、フェスティバルにも500名近いボランティアを活用
- **The Autumn Stage(オータム・ステージ)**: 素人の高齢者を語り部や即興劇の役者として訓練し、ボランティアで高齢者用施設などへの慰問公演を実施
- **The Public Theater(パブリック・シアター)**: インターン制度の事例としてコミュニティ事業部における活動を調査
- **New York Mayor's Voluntary Action Center(MVAC)**: ボランティアをしたい市民と、ボランティアを採用したい組織や団体をつなぐニューヨーク市長直轄の機関

(2) ボランティアの運営方法

では次に、これら事例調査の結果から、米国の劇場・ホールにおけるボランティア活動を中心にその実態をみてみよう。ただし以下では、上記6事例のうち、劇場・ホールの3事例を中心に分析することとする。

① 導入の経緯と背景

劇場やホールに限らず、米国の文化施設はNPOによって運営されており、運営主体の成り立ちそのものがボランティア的な活動によって成立している。したがって、わが国のように、初めに文化施設とそれを運営する主体(多くの場合は地方自治体や地方自治体によって設立された財団法人など)があつて、その運營業務をサポートするためにボランティアが導入されるという事情とは大きく異なっている。

● ボランティアによるリニューアルによって誕生した文化施設

調査した3ヶ所の劇場やホール施設のうち、2ヶ所までが、既存の老朽化した施設をリニューアルして文化施設として再生するところからボランティアの手によって行われている。この事実は、そもそも、わが国と米国の文化施設の社会的な成り立ちの違いを象徴するようで興味深い。

例えば、マンハッタンのアッパー・ウエストサイドの北端に位置する「シンフォニー・スペース」は、音楽、演劇、映画など多様な分野で年間約200の自主公演と140ステージのレンタル公演を実施している劇場であるが、もとは「シンフォニー・シアター」という映画館として利用されていた。1960～70年代の地域再開発の流れの中で、民間デベロッパーが、映画館としての活動を停止し廃屋となっていたこの建物を取り壊して、商業施設として再開発しようという話が持ち上がる。その時、地域住民が1915年に建てられた歴史ある建物の取り壊しに反対し、「ビルの救済と文化施設としての再利用」を訴え、土地と建物の権利と使用権の譲渡を受け、78年に現

在の活動を開始した。

発足から数年間は、2名の設立者(無給)と地域住民のボランティアによって運営されており、まさしくボランティアによる設立、ボランティアによる運営をベースにした文化施設である。劇場として再生するための改修工事費も、ボランティアの手によって資金調達が行われたという。

一方、マンハッタンの南端からフェリーで約30分、スタッテン島にある「スナッグ・ハーバー・カルチュラル・センター」も地域住民の手によって歴史的な建物が文化施設として再生された例である。

19世紀に海運業で財を成した実業家の遺志に沿って、船員のリタイアメント施設「セイラーズ・スナッグ・ハーバー」が今世紀初頭に完成し、運営されていた。その後1960年代頃までに、収容する船員の数が激減し、管財人委員会が最後の居住者たちをノースカロライナの同様の施設に移住させ、土地と建物の一切をニューヨーク市に売却。一時は民間デベロッパーに売却して商業的に開発するという話もあったが、長い歴史を残す同施設を保存したいと強く望んだスタッテン島の住民が反対。市の主導で非営利法人「スナッグ・ハーバー・カルチュラル・センター」が設立された。当初の運営は、「シンフォニー・スペース」同様地域住民のボランティアによって成り立っていたという。

現在では敷地全体が「全米歴史保存区域」に、敷地内に残る26棟の建物のうち6棟が「ニューヨーク市歴史保存建築」にそれぞれ指定されており、現在も文化施設としての利用を目指して数棟は改築中である。

こうして、ボランティアの手によって設立された文化施設では、その運営にボランティアが参加するのはある意味で当然のことであろう。各地に次々と新しい公共ホールが建設され、事業予算やスタッフ不足からボランティアを導入する例の多いわが国の状況と比較すると、文化施設そのものの目的やあり方といったことまで考えさせられる事例である。

● 準備段階からボランティア組織を設置した「ケネディ・センター」

一方米国を代表する大型複合文化施設の「ケネディ・センター」では、500名を越えるボランティアが年間を通してセンターの運営に携わっているが、設立準備段階に既に「フレンズ・オブ・ザ・ケネディー・センター」というボランティア組織(会員組織も兼ねる)が結成されている。この組織の発足は1965年、センターのオープンは71年であり、実にオープンの5年以上前からボランティア組織が設立されていたことになる。

もともとこの施設は、アイゼンハワー大統領の発案によって「アメリカの芸術文化の殿堂」たる施設として計画され、その後ケネディ大統領に引き継がれて舞台芸術の施設とすることが定められた。ケネディ暗殺後はジョンソン大統領によってケネディ大統領のメモリアルとすることが決定されて設立された文化施設であり、連邦政

II. 米国のパフォーマンス・アーツ分野におけるボランティア活動の実態

府の外郭団体であるスミソニアン機構によって運営されている点は、いわゆる民間非営利団体の運営する劇場やホールとは位置づけが異なっている。

オープン後の5年以上前にボランティア組織を設立した目的は、センター実現のための資金集め、オープン後の円滑な運営のための協力体制づくり、そしてセンターへの世間の関心を高めることが目的だったという。

● その他一般的な傾向

「MVAC」でのインタビューによれば、古くからツアー・ガイドにボランティアを導入しているミュージアム系の施設と異なり、劇場やホール系の施設でボランティアの照会が増加したのは10年ほど前からだという。

その背景には、景気後退の影響を受けて、企業等からの寄付金の減少、公的援助の縮小等が進み、その結果スタッフの削減をする施設が増加し、それがボランティアを導入する施設の増加につながっているということであった。

② ボランティアの業務内容と運営体制

次に、ボランティアの実際の業務内容や運営体制を見てみよう。

● カウンター業務を担うボランティア：シンフォニー・スペース

ボランティア活動の規模が比較的小さい「シンフォニー・スペース」では、ボランティアの登録者数約100名のうち、積極的に活動をしているのは25～30名。業務の内容は、毎日、公演の開始前と休憩時間に、観客にこやかに接して友の会メンバーの勧誘やチラシ配布等を行うカウンター業務が中心。そのほかには、DMの発送業務、ファンドレイジング・パーティのボランティアなどがある。

毎日のボランティア担当者のスケジュール調整や連絡を担当するボランティア・コーディネーターもボランティアの一人が務めている。組織として特別な体制が組まれているわけではないが、このコーディネーターの存在は、当施設の運営にとって欠かせないものとなっている。

● 幅広い業務内容と委員会運営：スナッグ・ハーバー・カルチュラル・センター

一方、多彩な文化活動を展開する「スナッグ・ハーバー・カルチュラル・センター」では、140名のボランティアが次のような幅広い業務に取り組んでいる。

- ・オフィス内の業務：ギフトショップの販売員・帳簿係り、一般事務アシスタント、DM 発送業務、メンバー勧誘・チケット販売などの電話セールスなど
- ・舞台芸術関連：チケットもぎり、アッシャー（プログラム配布・客席案内）、案内カウンター係り（富くじ販売、メンバー勧誘、アンケート配布など）、野外コンサートでの会場整理・プログラム配布、折り畳み椅子貸出係りなど
- ・展覧会関連：チケットもぎり、オープニング・パーティ関連業務
- ・その他催し物関連：敷地内のツアー・コンダクター、古本市などの集客イベントの際の警備・案内・販売係り

この140名のボランティアを管理・運営するための組織として18名のボランティア

からなる「ボランティア委員会」が設置され、その長として任期1年のボランティア・リ
プレゼンタティブ(委員長)が選出される。

このセンターでは有給のボランティア・コーディネーター1名が雇用されており、ボ
ランティア業務全般の運営・管理を行っている。上記のボランティア委員会は、この
ボランティア・コーディネーターがオブザーバーとして参加する形で、年に5回開催
される。そこではボランティア業務に関する検討だけではなく、他の文化施設の団
体観賞計画や遠隔地へのバスツアーの計画なども検討される。こうした活動は、ボ
ランティア・メンバー自身が楽しむクラブ・ライフ的な活動であると同時に、新しい仲
間を勧誘したり、ボランティアの自主性を高めることなどにも効果を発揮している
という。

● 組織化されたボランティア運営: ケネディ・センター

今回調査した事例の中で、ボランティアの業務内容、運営体制が最も細かく整
備されていたのが「ケネディ・センター」である。ここでは、通常運営時と毎年9月に
行われるフェスティバルの両方で多種多様な業務にボランティアが活躍している。

「フレンズ・オブ・ザ・ケネディ・センター」と呼ばれる通常運営時のボランティア組
織には、650名が登録し、そのうちの約500名が活発に活動しており、業務の内容
は次の5つの部門に分かれている。

- ギフト・ショップ: 販売、キャッシャー、会計、在庫管理(10:00~21:30)
- ツアー・ガイド: 一般客、団体、英語圏以外の観光客、政府関係者、国賓な
どを対象にツアー・ガイドを実施(10:00~14:00)
- ライブラリー: 目録作成、コンピューター・インプット、資料の出し入れ、利用方
法案内など(火~土、12:00~20:00)
- パブリック・インフォメーション・センター: 案内デスク係(10:00~21:30)
- フレンズ関連オフィス業務及びニュースレター編集・制作: 会員やボランティ
アの勧誘、名簿管理、DM 関連業務、ボランティア向けの“Friends Script”の
編集・制作など(月~金、10:00~17:30)

ボランティア・メンバーは「フレンズ・オブ・ザ・ケネディセンター」の構成員となり、
センターに有給で雇用されたボランティア・マネージャーによって、経験1年以上のメ
ンバーの中からシフト・チェアマン(任期は1年)が選抜・指名される。

上記業務はいずれも、「10:00~14:00」、「14:00~18:00」、「18:00~21:30」の3つ
の時間帯ごとにシフトを組んで対応することになっており、そのスケジュールを管
理・調整するのがシフト・チェアマンの役割。シフト・チェアマンは、各業務の曜日別、
シフト時間別の責任者約60名を集めて、年4回のミーティングを行い、ボランティア
業務の反省点、問題点、改善策などが話し合われる。

さらに、ボランティア自治組織のトップ機構として「ボランティア・アドヴァイザリー・
コミッティ(VAC)」が存在する。VAC のメンバーは、前述の各業務ごとの代表者各1

II. 米国のパフォーミング・アーツ分野におけるボランティア活動の実態

名、ケネディセンターに本拠を置く芸術団体（「ナショナル・シンフォニー・オーケストラ」や「ワシントン・オペラ」など）のボランティア組織の代表者各1名によって構成され、毎月一度のミーティングでは施設全体の運営におけるボランティアの役割などが検討される。

このように、「ケネディ・センター」のボランティアは、それぞれの業務の目的が明確にされ、各メンバーの可能な業務内容や時間に応じて、組織的な対応が確立されており、さらに、その運営方法はボランティア自身による極めて民主的な自治体制が採用されるなど、米国の劇場・ホールにおけるボランティアのあり方のひとつの到達点を示していると考えられる。

● ボランティアによる大量動員イベントの運営：ケネディ・センター・オープンハウス・フェスティバル

「ケネディ・センター」で毎年9月の第2日曜日に開催される「オープンハウス・フェスティバル」では、オペラハウスを除いた全施設が1日中開放され、50演目以上の催しが無料で開催される。このイベントはセンターを広く知ってもらうことを目的に始められたが、現在の集客数は約4万人。その運営を担うのが500名近いボランティアである。

通常運営時のボランティアと異なり、1日だけに大量の業務が集中するため、様々な工夫が行われている。まず、注目されるのが非常に細分化されたボランティアの業務内容。「風船膨らまし係りのサポート」に始まり、「臨時会場の設営・撤去」、「会場整理係り」、「ギフトバッグ手渡し係り」、「楽器のデモンストレーション演奏」などなど実に28種類のボランティア業務が細かく規定されている。

500名のうち約半分が前述した通常運営時のボランティアで、残りの半分がこの日のために集められた臨時ボランティア。全体を統括する2名の委員長が設けられ、その下に上記各業務ごとに2名のリーダーが指名され、正午から午後3時まで、午後3時から6時までの2交代制で運営されている。全ボランティアの名前が記載された業務分担兼シフト表は14ページに及ぶ。ボランティア申込書に記載された各自の希望を踏まえながら、それぞれに各業務・各時間帯へ割り当てる作業は、委員長の役割。

③ ボランティア・コーディネーター

ボランティア運営の中核を担うのが、ボランティア・コーディネーターあるいはボランティア・マネージャーと呼ばれるスタッフである。「シンフォニー・スペース」では、ボランティアの中からコーディネーターが選ばれていたが、「スナッグ・ハーバー・カルチュラル・センター」、「ケネディ・センター」では、それぞれ有給のボランティア・コーディネーター、ボランティア・マネージャーが採用されている。

ボランティアの円滑な運営には、このボランティア・コーディネーターの果たす役割が重要という点で、各館とも認識が一致していたが、特に、500人以上のボランテ

リアを扱う「ケネディ・センター」のボランティア・マネージャーの意見には、その役割や具体的なボランティアへの対応方法など、示唆に富む点が多いと思われるため、以下に主要なコメント(ボランティア・マネージャーにとっての課題)を列記した。

- ボランティアと有給スタッフでは仕事に対するコミットメントの種類が違う。「義務感と満足度」がうまくバランスする地点を見極め、「ボランティアすることの意味」をはっきり提示することが重要
- 役務の内容をできるだけ詳細に規定し、何をどこまでしてもらえばいいのかという目標基準をはっきりと提示すること
- 500名にもものぼるボランティアの顔と名前を覚え、各自の得て不得手や個性を把握しておく必要があり、そうした意味で大卒レベルの「専門職」でなければならない
- 問題が生じるのは、同僚のボランティアとうまくいかない、担当の有給スタッフとスムーズに仕事ができないなど、たいてい人間関係についてで、それをうまく聞き出すようにして「すべてを知っている」ことが重要
- そのボランティア適正ジャンルを見極めること、また、「好き」なのか「やってみたい」のか「向いている」のかなど、向き不向きと本人の希望をバランスさせることが大切な技術
- ボランティアを「平等」に扱うことが大前提だが、複雑な仕事をしている人と単純な仕事をしている人、週に20時間も来る人と週3時間だけの人、などにコトの大小・多寡では評価できないことが難しい

④ ボランティアの募集方法、研修など

● 募集方法と申し込み

ボランティアの募集は、あらゆる機会を通じて行われている。

まず一般的な方法として、劇場やホールのメンバーシップ募集用紙には、メンバー募集とあわせて、「ボランティア参加希望」を尋ねる欄が設けられている。劇場やホールの発行する情報誌にボランティア関連のニュースを記載してボランティア募集を行ったり、またボランティアを対象としたニュース・レターにボランティアの勧誘を促す記事を掲載することなども一般的な方法である。

「シンフォニー・スペース」では、ボックス・オフィスの案内電話が、プッシュホン・ダイヤルの選択式になっており、その中にボランティア参加への対応番号が組み込まれていて、それを選択した人は名前と連絡先の電話番号をメッセージとして残してもらおうというシステムを採用している。

「スナッグ・ハーバー・カルチュラル・センター」のように、新聞等の印刷媒体や放送媒体を使う施設もある。地元のローカル新聞や地域情報誌などへの掲載、あるいはローカルのケーブルテレビ局やラジオ局などでの宣伝といった方法だが、いずれも広告掲載料、放送料は無料になっており、こうした点でも米国のボランティア

II. 米国のパフォーマンス・アーツ分野におけるボランティア活動の実態

活動を支えるしくみの成熟度が伺える。

ボランティアへの参加希望のあった人には、劇場やホール側の側から連絡が取られる。その際、「シンフォニー・スペース」と「スナッグ・ハーバー・カルチュラル・センター」ではボランティア・コーディネーターによって、希望職種や可能な活動時間帯・頻度などが確認される。

また、「スナッグ・ハーバー・カルチュラル・センター」や「ケネディ・センター」では、アンケート用紙や申込用紙を送付し、必要事項を記入して返送してもらうしくみになっている。「ケネディ・センター」では、メンバーシップ代割引券や返信用封筒など、ボランティア希望者への送付書類が専用封筒に入れられ、希望者にはすぐに手渡したり郵送したりできるようにキット化されている。

● オリエンテーションと教育・研修

「スナッグ・ハーバー・カルチュラル・センター」では年に数回、「ケネディ・センター」では年に2回のオリエンテーションが行われる。前者ではアットホームな雰囲気とするため、お茶やお菓子が用意され、センターの施設概要や歴史、活動の目的などが広く紹介される。個々のボランティア業務の詳しいオリエンテーションは各部門の古参ボランティアに任されている。

「ケネディ・センター」のオリエンテーションでは、センターの成り立ちや運営体制、ボランティアの自治構造、服装やモラル、勤務態度などの細則が記載された20ページ近いボランティア・ハンドブックと、言葉使いや電話対応などの基本的な接客方法の記載された接客マニュアルが手渡される。

業務の内容が確定すると、それぞれの業務に対応したマニュアルが配られ、具体的な業務の内容は、先輩の指導によって訓練されることになっている。「ケネディ・センター」の場合、ボランティア開始後の3ヶ月は「仮採用」の扱いで、この間の「出勤率」、「誠意」、「知識の吸収度」をボランティア・マネージャーが評価し、基準に達している場合にのみ、正式採用されるというしくみになっている。正式採用された後も、定期的に評価の見直しが行われ、業績が基準に達しない場合は、一時的な“停職処分”が言いわたされるという厳しさだ。

「オープンハウス・フェスティバル」の場合は、開催の1週間前に公開オリエンテーションが開かれ、フェスティバル当日は、開始前に業務ごとの説明会が開かれて、実際の業務の内容、対応方法等が確認される。

(3) ボランティアの横顔と参加の動機等

米国の事例については、ボランティア参加者へのインタビュー、アンケート等は実施しなかったが、調査の過程で得られた情報を参考に、簡単に整理してみた。

① ボランティアのプロフィールと参加の動機

まず「シンフォニー・スペース」の場合、映画が無料で見られるといったボランティア参加の“役得”よりも、「This is ours!」、すなわち「この劇場は私たちのものなん

だ」という強い意識が、何よりもボランティア参加の一番の動機とのことであった。ボランティア・コーディネーターは、周辺地域での生活が長く、この文化施設の常連であることから、リタイア後はこの文化施設でボランティアをしたいと考えていたという。

参加者の傾向としては、カウンター業務は比較的若年層が、また平日の昼間の時間帯に活動するDM 発送のボランティアは高齢者が中心。

一方、「スナッグ・ハーバー・カルチュラル・センター」で働くボランティアの平均年齢は50～60歳代が中心で、近年高齢化が進みつつあるという。女性の割合が高く、美術や舞台芸術など、何らかの芸術に興味を持っている人が多い。

リタイアした人にとっては、「家から出て人と会う」という社交の機会をボランティア参加の動機にしている人が多い。地元の自慢の文化施設で働くことを誇りに思い、ボランティアの仕事をとおして知的好奇心、知的刺激が与えられ、またそのことを通じて新しい経験や友人を得られるといったことも動機になっているようである。

また、「ケネディ・センター」でも、ボランティアは50～60歳代の人々が7割を占め、中でも60歳前後のリタイアした人が多い。首都圏近郊や通勤圏内の住宅地に住む人で、舞台芸術に興味のある人、すなわち比較的豊かな中産階級以上の白人層が中心。開館後25年間ボランティアを続けている人もいる。フェスティバルの力仕事には、こうした人々では対応できないので、特別に米軍の機関にボランティア要員を提供してもらうとのこと。

参加の動機は、友人がボランティアをしているから、あるいは舞台芸術が好き、劇場の内部事情に触れられるといったことなどで、このあたりは、わが国のボランティア参加者の意識と共通する部分も多い。

② ボランティア参加の特典と館側とのコミュニケーション

ボランティア参加者への特典としては、それぞれ次のようなものが用意されている。

- ・シンフォニー・スペース：映画上映時のカウンター・ボランティアは無料で映画鑑賞が可能、勤務時間が10時間になった DM 発送ボランティアにはチケットが2～5割引になるメンバーの資格を付与
- ・スナッグ・ハーバー・カルチュラル・センター：半額チケットを2枚進呈
- ・ケネディ・センター：駐車場利用が無料、交通費実費支給、ニュースレター「フレンズ・スクリプト」の毎月送付、メンバーシップ加入料10ドル割引、無料コンサート・チケットの進呈（不規則）、ギフトショップ割引など

こうした特典とは別に、施設がボランティアに対して感謝の気持ちを表す機会が豊富に用意されているのも、米国のボランティア活動の特徴だろう。

例えば、「シンフォニー・スペース」では、時々小さなティー・パーティーを開いて、ボランティアを招待したり、パフォーマーと直に接する機会を設けることがあるが、これは、ボランティア参加者に感謝の意を伝えるために開催されている。

II. 米国のパフォーミング・アーツ分野におけるボランティア活動の実態

また、「スナッグ・ハーバー・カルチュラル・センター」では、年に何回か「サンキュー・ランチ」、「サンキュー・ディナー」、「サンキュー・ティー・パーティー」などのほか、ボランティアの家族も参加できる「ホリデイ・パーティー」を開催している。さらに、大きなイベントが終了した時点では、ボランティア・コーディネーターから「サンキュー・レター」が送られる。

「ケネディ・センター」でも、ボランティアと館側のスタッフが交流するために「ティー・パーティー」が開催されるが、毎年12月にはボランティアの感謝パーティーとして「ボランティア・リコグニション・ガラ」が開催される。そこでは、優秀な業績を残したボランティアに、その業績に応じて様々な表彰が行われるしくみになっており、その細かな規定はいかにも米国らしい*³。「オープンハウス・フェスティバル」のボランティアには、ユニフォーム代わりに T シャツが無料配布されるほか、イベント終了後の“打ち上げパーティー”も開催される。

具体的な目に見える形での報酬よりも、ボランティアにとっては、自分の活動が施設の運営に役に立っているという実感が重要で、こうした館側からの感謝の意を表明することは、ボランティアの円滑な運営にとって重要なことだと考えられる。実際、「ボランティアにとっては、“Thank you!”と言ってもらうことが何よりの報酬」という声も聞かれた。

(4) 問題点・課題

ボランティア運営に関する問題点や課題としては、各劇場から次のような事項が指摘された。

● シンフォニー・スペース

- ・事務作業のアシスタントとして長期的なボランティア・スタッフが欲しいが、ある程度責任ある仕事を任せるとなると、今のように誰でもいいという訳にはいかない
- ・定期的にオフィスに通うということになると、自分の自由裁量の中で行動できる範囲を超えてしまうので、ボランティアの域を出てしまうことになる

● スナッグ・ハーバー・カルチュラル・センター

- ・全米の傾向として、ボランティア人口が減少しており、ボランティアの平均年齢が年々高齢化している
- ・常に新しいボランティアを採用して140名を確保しないと、センターの運営が困難に直面する

● ケネディ・センター

- ・ボランティアというものが「古い」風習と考えられつつあり、いかに若い層を取り込

*³ ①ボランティア・オブ・ザ・イヤー：長期に尽くした優れたボランティアを表彰、②プレジデント賞：ボランティア歴5年以内の人には表彰状、5年・10年・20年の人にはそれぞれ色違いのピンと表彰カップを進呈、③フレンズ・オブ・ライフ賞：15年以上勤務した人には名誉賞として表彰状、リコグニション・ガラへの生涯招待、フレンズ・スクリプトの生涯送付、ギフトショップの15%生涯割引(10ドル以上)が、それぞれ与えられる。

むかが課題

- 一般企業との連携・協力に基づいて、若いプロフェッショナル層のボランティアを採用していきたい

また、「メイヤーズ・ボランティア・アクション・センター」では、

- 昔のボランティアは職種にこだわらなかったが、最近では業務の内容によって満足・不満足の違いが出るようになった
- 昔のボランティアは「仕事を持たない人」が主力だったが、近年では働く人の参加が増えている
- 芸術団体のボランティアは、旧来アーティストが応募するケースが多かったが、近年は、ビジネスのオフィス環境で働いた経験のあるスタッフが求められることが多い
- 有給スタッフには、優秀なボランティアを導入することによって自分の地位が脅かされるのではないかと懸念する傾向があり、また実際に予算縮小のあおりから有給スタッフを削減してボランティアの労力でカバーする例もある

といった一般的な傾向や問題点も指摘された。

長い歴史を持つ米国のボランティアであるが、ボランティアに対する意識の変化、社会構造の変化から*⁴、ボランティアの高齢化、ボランティア人口の減少などが問題となっているケースも多いようである。

*⁴ 具体的には、共働きの増加、レクリエーションの多様化、中産階級の生活の貧困化など、あるいは共働きや片親の増加から休日はできるだけ子どもと過ごそうという人が増えている、といったことによるボランティア人口の減少を指摘する人もいた。

* なお、本章「米国のパフォーマンス・アーツ分野におけるボランティア活動の実態」の調査・分析は、Archi・Pel・a・go Co (NY) の協力を得て実施したものである。